

古代ローマ

渡邊浩一

弁論術入門

2000年間、世界が学び続ける

古代ローマ最高の
知性が実践した

話術の極意!

『テルマエ・ロマエ』『プリニウス』作者

ヤマザキマリ推薦!

——弁論の力は言葉の力と想像力を鍛え、社会に熟成をもたらす。
成熟した人間と国を築く古代からのヒント。

古代ローマ弁論術入門

渡邊浩一

星海社

393



SEIKAISHA
SHINSHO

一 序言 *exordium* いったい弁論はどこで誰に教わるものでしょう 3
 脱線 *digressiō* ① 「修辞学教師」西秀秀信 11

二 叙述 *narrātiō* 青年はフォルムをめざす 15
 二・一 弁論術の生まれたところ 16
 二・二 若きキケロの弁論修業 24
 二・三 「キケロは人間の名前ではなく雄弁の名前」 30
 脱線 *digressiō* ② ROMAHOPEDIST 柴田光蔵 34

三 区分 *partitīō* ポイントは「発想」と「実演」、
 学びの基本は《理論・範例・実践練習》 37

四 立証 *confirmātiō* I キケロに倣って弁論を組み立てる 42
 四・一 理論：『発想論』と《序言・叙述・区分・立証・反駁・結語》の規則 42
 四・二 範例：出世作『セクストゥス・ロスキウス弁護』に照らして 63
 四・三 実践練習：講義科目のレポート例『湯婆婆弁護』 92
 脱線 *digressiō* ③ 小説 *Roman Blood*：異なる視点から 103

五 立証 *confirmātiō* II 争点を絞り込み、両側から考える 107
 五・一 理論と範例：『発想論』争点論によるリバーシエンジニアリング 107
 五・二 実践練習：キケロとローマの弁論学校の模擬弁論 123
 五・三 実践練習：初年次ゼミでの模擬弁論『火星弁護』 129
 脱線 *digressiō* ④ 高校生模擬裁判選手権 141

六 立証 *confirmātiō* III 実演するまでが弁論です 145
 六・一 実践練習：デモステネスからゼレンスキーへ 145
 六・二 理論：『ヘレンニウス宛の修辞学』実演論 148
 六・三 実践練習：ロドスのモロンから教わったこと 155
 脱線 *digressiō* ⑤ 鴻上尚史『発声と身体のレッスン』を読む 161

七 結語 *conclusiō* スピーチするならローマ人がしたようにせよ 164

文献 *bibliographia* 187

凡例 *admonitiō*

- 一
ギリシア・ローマの人名のカタカナ表記は、原則として岩波書店辞典編集部「編」『岩波世界人名大辞典』（岩波書店、2013年）に準拠します。地名のカタカナ表記、著作タイトル、主要なテクニカルタームの訳語については、慣例および各種文献を踏まえつつ適宜判断します。
- 二
ギリシア・ローマの人名、一部の地名、著作タイトル、主要なテクニカルタームの初出時に、原語をローマ字表記で併記します。母音の長音は「　」で示しますが、ラテン語については水谷智洋「編」『羅和辞典 改訂版』（研究社、2009年）に準拠します。
- 三
ラテン語の原文は主にロエブ古典叢書 (*Loeb Classical Library*)、所収のテクストに依拠します。ただし原語の併記に際して、アルファベットの綴りは今日の慣用にしながら改める場合があります。
- 四
キケロの著作の引用・参照は主に岡道男ほか「編」『キケロ選集』（岩波書店、1999年、2002年）所収のテクスト、後に文庫化された場合はより新しい訳本に依拠します。ただし固有名詞の表記およびテクニカルタームの訳語については、上記一・二の方針および各種の参考文献にしたがって改変する場合があります。
- 五
キケロおよびその他の著者からの引用にあたっては、著者ないし訳者・タイトル・ページ数を示します。ただし前後の文脈から明らかな場合、一部を省略することもあります。引用・参照文献は、巻末の文献表にバートンごとに掲載します。

一序言 *exordium*

いつたい弁論はどこで誰に教わるものでしょう

おひまでないかもしれない読者のみなさん。『古代ローマ弁論術入門』と題した本書ですが、それなりの長さになる以下の論述の目的は、端的には、西洋の弁論教育の本流であるキケロ（Cicero）の修辞学の有用性を示し、みなさんを古代ローマ式のスピーチ実践へと誘うことにあります。……であるからには、著者はキケロか修辞学——できれば両方——の専門家に違いない。当然、そう期待されることでしょう。

しかしはじめに正直におことわりしておく、私はそのどちらでもありません。研究上の専門は近代ドイツ哲学史、とくにカントおよび新カント派の認識論です。そもそも古代ローマに関わるものですらありません。……と聞けば、そんなあやしげな新書につきあつ

ている時間はないとすぐにページを閉じてしまわれるでしょうか。あるいは腹立ちまぎれに早速ネットのレビューで最低の評価をつけられるでしょうか。

ですが、この主題に関して日本に「専門家」がいなるとすればどうでしょう。

たしかに、共和政ローマの哲学者・政治家として知られるキケロについてはわが国でも相当に研究の蓄積があります。大学の学部区分でいうと文学部の西洋古典学（とくに古代ローマの哲学・歴史学・文学）、および法学部の西洋法制史（とくにローマ法）を専攻する人びとによって、キケロの著作の多くが翻訳され、緻密ちみつに分析・解釈されています。

いっぽう修辞学は、広くことばに関わる知的訓練の総仕上げを担になう古典的リベラルアーツの一学科ですが、わが国ではとくに国語教育および文系の学問全般の源流の一つとして折々に顧かえりみられてきました。またここ半世紀ほどは、正しく美しい文章作法という旧来の関心をこえて、「レトリック」という古代ギリシア由来の名称のもと、言語活動の実践性・創造性に注目した学際的研究が進められています。このどちらかの意味で「レトリック」の語を表題に掲げた書籍は枚挙まいきよに暇いとまがありません。

しかしながら、それでいて日本の学校で弁論教育がキケロに依拠して行われている様子はまず見られません。修辞学・レトリックがそもそも、説得的な言論によって公衆を導く

「弁論家」の育成を目的とする学科であり、キケロは生涯にわたって何よりその弁論家であることを自ら任じていたにもかかわらず。そしてリベラルアーツとして修辞学を学ぶとは、要するにキケロの書いた理論書と実際に行つた弁論から学ぶことであつたにもかかわらず。

なぜこのようなギャップが生じるのか。大上段に構えていえば、それは近代の学問、日本の近代化の宿命です。

古代ギリシアに発する弁論術としての修辞学は、元来、総合的な学芸で、ことに弁論家キケロはまさに全人的「教養」——彼自身のことばでいう「フマニタス (humanitas)」——を体現する人物ですが、ひるがえって、近代の諸科学は全体を一定の観点から精緻に分析するもので、その自己限定にこそ専門家の作法・倫理があります。ですからキケロの文学やローマの修辞学の専門的知見をおいそれとは弁論教育の実践に折り返せません。そのため、まるごとの知・技芸を標榜^{ひょうぼう}する弁論術は、「専門」という立場からは誰も担いえず、どこでも教えられないものになつてしまつたのです。

ですが当の弁論は今日の日本でもさまざまな機会に求められます。演説のような肩肘張^{かたひじは}つたものとはかく、ちよつとしたスピーチやそれなりのプレゼンテーションであれば、

所属する学校、会社、コミュニティで誰にも一度や二度はお鉢が回ってきます。社会はみなさんに多かれ少なかれ弁論家たることを求めているのです。修辞学・弁論術とはまさにそのノウハウを提供するものだったわけですが、しかし西洋が教育の近代化のためにいったんそれを手放した時期に西洋化を始めたため、日本の教育の中にこの学芸の伝統が息づいているわけではありません。

だから見よう見まねでやってみた。結果、入り口で転んで最後まで滑り切った。原稿を朗読していたらどんどん聴衆が遠くなった。ゴールを見失ってダラダラ話し続けた末に強引に打ち切った……。そうした苦い経験をおもちのかたも少なくないでしょう。スピーチやプレゼンテーションのハウツー本が引きも切らず刊行されるのも無理からぬことで、「学校では教えてくれなかった弁論術」を学びたいというひとは、書店で一つのコーナーができるほどには現代の日本にも存在しているわけです。

であれば、みなさん、その中にキケロに依拠した技法書もあってしかるべきだと思われませんか。せっかく弁論を学ぶなら、スキルだけでなく教養も身につけたい。ネット記事や動画でなくわざわざ書籍を選んで、しかも本書を手に取りられたみなさんは、おそらくそうした優れて欲張りな——そして心にひまのある——かたがたに違いありません。

ただ、それでは誰が書くのか。専門家がいなとすれば、誰があえてそれをするのか。ギリシア由来の古代都市国家において、若者を社会に送り出す教養教育の総仕上げを担ったのは「弁論教師」と「哲学教師」でした。弁論術と哲学のうち若者の多くが好んだのは、ご想像のとおり、立身出世につながるりやすい前者で、そのため哲学教師も（半ば一方的に）ライバル視している弁論術を——弱論を強弁するそのテクニクのいかかわしさを批判しつつ——自らの教育カリキュラムに取り込むことがしばしばでした（「ソフィスト」という声が聞こえたような……いや、気のせいでしょう）。

ところで近代の学校教育に弁論教師の存在する余地はありません。いっぽう哲学教師は大学の教養課程などで細々と生きながらえています。研究者としては他の分野と同様、細分化されたテーマを専門としながら、教師としては引き続き若者の教養教育、つまりまるごとの知的トレーニングを担う位置にいます。そうすると（一部の）哲学教師は、自らの職業性を省みるにつけ、だんだん居心地が悪くなつてきます。「社会からの要請」を名目に大学は学生たちに頻繁にプレゼンテーションやスピーチを求めるようになっていく。しかし、かつてその教育を担ったライバル、弁論教師はもういない。にもかかわらず弁論が教えらるべきものだとすれば、誰が担うべきか。ひよつとして哲学教師の出番ではないだ

ろうか……。

そんなわけで日本の大学に籍を置くいち哲学教師として、おちちよちよいにも私はキケロに依拠した弁論教育を始めてしまいました。研究者としての仕事は近代ドイツの哲学者たちの文献解釈ですが、大学の教養課程の教員としてのそれは市民の育成です。今日の大学で一般化している初年次学生向けのライティングやプレゼンテーションの教育もそうした仕事の一環です。しかし、純然たるスキルのトレーニングとしてこれを行うのはあまりに味気ない。それで思い余って、読み齧^{かじ}ったキケロに導かれるまま担当科目のいくつかで古代の弁論教育を範^{はん}としたライティング・プレゼンテーション指導を試みるに至ります。

たとえば古典的リベラルアーツを扱う講義科目の期末レポートでは、キケロの修辞学理論書と実作によって弁論の枠組みと勘所^{かんところ}を学び、それを踏まえて自分で弁論の原稿を書く。また初年次のゼミでは、同じく弁論の原稿を作成し、実演の練習をし、聴衆の前にパフォーマンスする。わざわざキケロを引き合いに出すことを除けば、実にオーソドックスな弁論教育ですが、その「わざわざ」が大事だと思っ^てやっています。

ところで、このおつちよこちよいはSNSにとりつかれた現代人でもあって、つい授業の手応えをつぶやいたところ、本書の編集者の片倉直弥さんの目にとまり、キケロに依拠した修辞学・弁論術本を書いてみないかとの誘いをいただきました。どちらの専門家でもないことによる躊躇ためらいはありましたが、やりたさが上回って——おそらく片倉さんはそれを見抜いておられたのでしょうか——引き受けてしまいました。それから数年、職場の事情に妨さまたげられつつ、キケロの弁論術のわか勉強を続けつつ、どうにか形になったのがこの弁論原稿です。ですから、本書の聴衆または審判人であるところの読者のみなさん。編集者の唆そそしはあったとはいえ、記述内容に関する最終的な責任は当然ながら著者である私が負うものです。

そのうえで、この先も読んでみようというつきあいのいいみなさん。弁論というのは全体として書かれ、実演されるもので、修辞学・弁論術はそうした技術の集成です。それが感じ取れるように——もうお気づきでしょうが——本書はまるごと一つの弁論の形をとっているのです、できればまず「序言」から「結語」までご通読ください。そうして古代ローマ式の弁論の全体像を掴つかんだうえで、弁論術はそもそも実用的な学芸ですから、ご自身のスピーチやプレゼンテーションの課題に焦点化して、やはりできることなら、キケロがや

ったように試みられるのがよいでしょう。

またここで扱う内容のいづれか——それがキケロ、修辞学、弁論教育、哲学教育であれ何であれ——に一家言おもちのみなさん。以上のようなわけで、本書はアマチュアの仕事です。関連分野の専門研究には大いに学ばせていただきましたが、能力・研鑽けんざんの不足により各方面の「警察」の出勤を招くかもしれません。専門的知見に基づく指摘をいただけるとすればたいへんありがたいことですが、取り調べにあたっては全体としてこの試みの成否を判定する公正な審判人の心持ちで臨んでいただければ……というのは虫の良いお願いでしょうか。

ともあれ、言い訳はこのくらいにしておきましょう。

脱線 *digressio* ①

「修辞学教師」

香西秀信こうさいひでのぶ

とはいえ、「日本にキケロ流の弁論教育の専門家はいない」という冒頭の発言にひっかかりを覚えたかたもおいででしょうから、少し補足説明をしておきます（これは「脱線」——「ディグレッショ (*digressio*)」——にあたるので、ひっかからなかった・先を急ぐかたはいったんスキップしていただいても差し支えありません）。

現代の学校教育には構造上、ギリシア・ローマ流の弁論教育の余地がなく、実践例もほとんど見当たらないことは事実ですが、「まず見られない」というのはそれこそ修辭的な誇張でした。先駆者ほどの分野にもいるもので、レトリック教育においては香西秀信（一九五八―二〇一三）こそがそのひとです。彼は大学の国語教員養成課程の教員として、ギリシア・ローマ以来の西洋修辭学を踏まえて学生の作文・討論指導を行うとともに、その研究教育の成果を数々の著作として世に送り出した、まさに自他ともに認める現代日本の「修辭学教師」でした。

一九九五年の『反論の技術 その意義と訓練方法』をかわきりに香西は十冊あまりのレトリック書を相次いで刊行しましたが、それらに一貫しているのは「レトリックは実学」という姿勢です。理論は古代のアリストテレス (Aristoteles)、キケロ、クインティリアヌス (Quintilianus) から近現代の修辞学教師、レトリック研究者まで手広くカバーし、实例は古今東西の文学作品——プラトン (Platon)、シェイクスピア、ドストエフスキー、漱石——や、昭和の評論文——小林秀雄、福田恆存、その他保守系の論壇人——からふんだんかつ的確に引き、どの一冊も「読ませる」だけでなく「使える」ものとなっています。

ところで、弁論というものがカバーする領域は広大ですが、香西が力点を置いたのは「議論」ないし「論法」と、それを踏まえた「作文」でした。ひるがえって本書は、弁論・スピーチの全体としての組み立てと実演に主眼を置くもので、その点では早世したこの偉大な修辞学教師の仕事を補完する余地があると考えています。しかし、再度ひるがえれば、弁論や討論・論争の核となる「論法」の深掘りや、弁論執筆のための準備教育にあたる「作文」トレーニングについては、彼の著作が本書の補完となるということです。ここではそれぞれについて一冊、紹介しておきましょう。

「論法」は香西レトリック論の真骨頂であるだけに複数の著作でさまざまな観点・題材に

拠って扱われていますが、まずは『レトリックと詭弁きべん 禁断の議論術講座』がおすすめ
です。

古来、レトリックに対しては相手を言い負かすための「詭弁」に陥おちいりがちであるとの批判が投げかけられてきました。しかし、議論の技術の追求は行きつくところ、正しくない判断の論証、つまり詭弁とならないわけにはいかない。そして人間は論理的な生き物として、議論に勝つことに本質的な喜びを覚え、逆に言い負かされると深く傷つく。——同書はそうした洞察のもと、世にはびこる詭弁的論法を事前に学び知り、その攻撃から心まもを護るための処方として十七の論法をそれぞれコンパクトに、かつ通読に適した分量で紹介したものです。

著者自身もあとがきで「最も愛着のある一冊」「もし私に書き手としての取り柄があるなら、その取り柄が一番いいかたちであらわれたのが本書」（2011・202頁）と書いていますが、たしかに香西レトリック論のエッセンスが詰め込まれた一冊です。議論に議論で対抗する仕方を教えてくれるだけでなく、その果てに議論が無効化した世界も夢想させてくれることでしょう。

いっぽう、作文教育については中嶋（森田）香緒里氏との共著『レトリック式作文練習

法 古代ローマの少年はどのようにして文章の書き方を学んだか』というユニークな教本があります。

古代ローマでは弁論学校での弁論トレーニングに先立って、文法学校で「プロギウムナスマタ (progymnasmata)」と呼ばれる作文教育を受けるのが通例でした。タイトルが示すように、同書はこの古代ローマの作文教育の方式に則って、先々の弁論原稿執筆を見越したいくつかの文章形式——具体的には「寓話」「物語」「逸話」「反論と立論」「賞賛と非難」——の学習をステップ・バイ・ステップで進めていくものです。

わが国では高校までの作文課題は昔も今もとりあえず感想文、というのが一般的です。ですがそれは、とくに大学以降に求められる論文形式の文章作成にうまくつながりません。そのためレポート・論文執筆の手ほどきをする授業が広く行われ、テキストも数々出版されています。スキルと教養を両立させる試みとして、フランスのバカロレア試験——これは中世の大学の論理学教育の伝統につらなるものです——に依拠する坂本尚志『バカロレア幸福論 フランスの高校生に学ぶ哲学的思考のレッスン』などとともに、古代の修辭学教育に基づく同書が広く参照されるようになれば、ライティング教育は内容面ですつと味わい深いものになっていくことでしょう。

次世代による次世代のための

武器としての教養 星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていききたい。若い力で、世界を変えていきたいのです。

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？ それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための「武器」としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていききたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長 柿内芳文



SEIKAISHA
SHINSHO